黒の異邦人（仮）

気まぐれ執筆家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の異邦人（仮）

【Ｎコード】
Ｎ２８２４Ｙ

【作者名】
気まぐれ執筆家

【あらすじ】
現代より少し前から現れ始めた未確認体。
それらは人類共通の敵とされ、今でも多くの被害を出しつつ人はそれらと戦っている。
そんな時代の、一人の少年の物語です。

普段の日常

目の前に広がるはモノが焼ける炎。
目の前に広がるは死体の山。
目の前に広がるは残状。
それらが不愉快な合奏曲となり、俺の頭に響いてくる。
その中で、アレは破壊のみを楽しむかのように、壊れたヒト、壊れたモノを子供がおもちゃを弄ぶかのように破壊する。
それは黒く。
そして禍々しく。
人とは似ても似つかない姿をしている。
俺は、その場で生き残った、だた二人のうちの一人としてそれを見ていた。
アレが俺の全てを、日常を破壊する光景を。
そして俺は思った。
俺に力があれば。
俺に何にも負けない力があれば。
アレを潰し、日常を守る事ができたのにと。
俺は、アレと、アレから全てを守れなかった俺自身を憎悪した。
だが、そんな思いも虚しく、アレは全てを壊していく。
それは何時までも続く。
アレが破壊に飽きるまで……。

……

……

…

「さん……」
……ん？
何だ？
俺の耳元で、誰かの声が響く。
声の感じからして、性別は女。
そして、俺は現状を考える。
身に纏っているのは寝る時に着替えた寝巻きだ。
そして俺は、今ベッドの中で寝ている。
つまり、ここは俺と妹の住んでる家の中であって、そんな状況で俺に声をかける女は一人しかいない。
そんな事を考えていると、
「兄さん、いつまで寝てるんですか！？」
今度はより鮮明に、声が聞こえてきた。
俺はいつものように、ゆっくりと意識を現実に向け、体を起こす。
そして、
「よう、おはよう、時音」
俺は俺の妹である時音に声をかけた。
時音はすでに制服姿に着替えていて、いつものように俺を起こしに来たようだった。
「兄さん、起きてご飯を食べて支度しないと、遅刻しますよ！」
腰に手をあて、少し怒った顔をしながら、俺に声をかける。
「分かった分かった。すぐ行くから、下で待ってろ」
「すぐ来てくださいよ。もう準備はできてますから」
言うと、時音は俺の部屋から出て行った。
「やれやれ。いつもの事ながら、世話好きな妹だ」
言いながら、俺はベッドから出て、寝巻きから制服に着替え始める。
「しかし、俺もまだあの光景を引きずっているんだな」
俺は、何度も夢に見るあの光景を思い出した。

俺がこれまで生きてきた中で、唯一の悪夢と言える事。
「……さて、早く行かないとまた時音に怒られる。早く行くとするか」
そう言い残し、俺は居間に向かった。

居間に向かうと、時音は先に食事をしていた。
「ふむ。今日はパンに目玉焼きか」
「はい。っていうか、早く食べてください。まだ時間に余裕があるとはいえ、無駄に時間を消費したあげくに遅刻ギリギリになって走って登校なんて、無駄すぎます」
「分かった分かった」
時音に急かされ、俺は席に着き、目の前にある食べ物に手を付け始める。
「……ふむ。今日の目玉焼きもなかなかに美味いな」
「ふふ、ありがとうございます」
俺の賛辞に、時音は頬を赤らめ答えた。
そんな事をしながら食事を済ませていく中、俺は傍にあるテレビに目を移す。
今テレビでは、また未確認体のニュースが流れていた。
未確認体がどこに現れただの、未確認体によって誰が殺されただの、未確認体を何匹殲滅しただのｅｔｃ……。
「最近、多いですよね」
「何、いつもの事だ」
「でも、こうしている間にも、未確認体に殺されている人が増えているんですよね」
「ああ、そうだな」
「早くこの事件が終わるといいんですけどね……」
時音は、食事を止めて顔を下に向ける。
「ったく、朝からそんなに感傷的になるな。ほら、早く食べて学校

に行くぞ」
「は、はい。兄さん」
そんなこんなで、俺達は食事を済ませ、家を出て、学校に向かった。

住宅街の中を、学校に向かって歩いていく俺と時音。
時音が時間を管理してくれているおかげで、普通に歩いても余裕で始業ベルに間に合う。
時音様々だ。
「ありがとうな、時音」
「ふえ？何ですか急に」
「いや、いつもお前が起こしてくれているおかげで、俺はこうしてのんびりと歩いても遅刻せずにすむ。その礼だ」
「い、いえいえ。好きでやっている事ですから」
「好きで？」
「あ！？えとあの、好きといっても家族愛という意味の好きであって、別に恋愛対象とかそういう意味では……」
顔を赤くし、あたふたしながらも時音が何かを言おうとしていると、
「よう、ご両人。元気ですかっ！」
声と同時に、俺の背中に衝撃が走る。
何事かと思う事も無い。
何せ、いつも彼女がしてくる事なのだから。
「お前に背中を叩かれるまでは元気そのものだったよ、静香」
言いながら後ろを振り向くと、そこには元気そうな女の子がいた。
「にゃはははは、悪い悪い」
彼女は言いながらも反省している様子はなく、頭の後ろに手を回していつものように笑っている。

綾乃静香。
俺が一年の時からの友人、もとい悪友で、何かと俺と静香にちょっかいをかけてくる。
名は体を表すという言葉はあるが、静香ほどその言葉が似合わない人間はいない。
どんな時でも元気で、彼女の辞書に落ち込むという言葉はないらしい。

「お二人も朝から仲がいいようで、こっちが照れるっつーの」
「な、仲がいいだなんてそんな……」
静香の一言に、時音はまた顔を赤くし、俯く。
「そうだ、俺と時音は家族、つまり家族愛だ。だろ？時音」
「は、はい、そうです！家族愛なんです！」
「はいはい、分かった分かった」
やれやれと手を振りつつも、にやけた顔を俺達に向ける静香。
「さて、漫才をやってる時間はないぞ。早く学校に行こう」
「はい、兄さん」
「了解～」
そんな事がありながらも、俺達三人は学校に向かった。

そして、下駄箱の前にて。
「それでは、兄さん、静香さん、さようならです」
そう言って、時音は靴を履き替え、一年の教室が並ぶ廊下へと走っていった。
「さてと、俺達も教室に向かうか」
「ほいさ」
そして、俺達は二年の教室が並ぶ廊下へと歩いていく。
「にしてもさ」
「何だ？」

「時矢と時音って、仲がいいよね」
「ああ。家族だからな」
「それにしてもだよ。今時あんた達くらい仲のいい兄妹なんて、そうそういないよ？」
「そうか？」
「まったく、家族愛とはよく言ったもんさ」
「何、それ以上でもそれ以下でもない、ただそれだけの事だ」
「何それ。にゃはは」
そんな掛け合いをしながらも、俺達は教室に入っていった。

「おはよう」
「おはよ～っす」
俺達二人の挨拶に、挨拶を返すクラスメイト達。
そして俺達は、それぞれの席に座った。
と言っても、
「ねえ、時矢。授業まで暇だから、何か話でもしない？」
俺の席の後ろが静香な訳だから、話し相手には不自由しないんだが。
「何をだ？」
「そうね～。最近の世界情勢とか！」
「と言っても、思いつくのはアレくらいしかないが」
「アレって……。もしかして、未確認体の事？」

未確認体。
現代よりも少し前から、前触れも無しに突然現れた、異形の怪物。
それらは人間と交える言葉を持たず、行うはただ破壊と殺戮のみ。
それらは未確認体と呼ばれ、人類共通の敵とされ、人間達は種族、国境の壁を超え、それらに立ち向かう事となった。
だが、それらは人間より圧倒的な力を持っていて、なおかつ誕生

の原因も分かっていないため、殲滅する事は容易ではなかった。

「……その話はやめにしないかな？時矢」

「そうだな。悪かった」

急に真面目になった静香に、俺は一言で返事を返した。

こいつが真面目な口調で話をする時は、本人にとっては真剣な話か、嫌な話だからな。

いや、アレの存在の話は、誰にとっても嫌な話でしかないだろう。

俺が返事を返すと、静香は途端に笑い顔になり、

「にゃは。ところでさ、昨日の授業なんだけど……」

「なんだ？」

俺達は、授業が始まるまで普段の雑談に戻った。

いつも通りの、普段と変わらない授業が終わり。

時は夕方近く。

「あ～、やっと終わった～」

席で大きく伸びをする静香。

「じゃあ、俺は時音と一緒に帰るから。お前は部活だったか？」

「そそ。毎日が忙しいのさっ。時矢も一緒にしない？」

「残念ながら、俺も帰宅部っていう部活があるからな。それにあいつも向かえにいってやらなきゃいけないし」

「帰宅部って……。まあ、時音も大事だしね。ＯＫＯＫ。んじゃ、また明日ねっ」

「ああ、またな」

挨拶を交わし、俺は教室を出て、下駄箱に向かう。

そしてしばらく歩いて。

「よう、時音。待ったか？」

下駄箱には、いつものように鞄を持って待っている時音がいた。

「いえ、少しだけです」
「そうか。じゃあ、帰るか」
「はい」
そうして俺達二人は合流し、一緒に家路に着いた。

家に着いた時に空を見上げると、太陽はまだ沈んではいなかった。
時音は制服から私服に着替えると、いつも通り買い物に出かけるようだった。
「兄さん、たまには一緒に買い物に行きませんか？」
「いや、俺は部屋で本でも読んでるよ」
「またですか？」
「ああ」
「まったく、兄さんも何か趣味の一つや二つ見つければいいのに」
「俺にとっては、これが趣味のうちの一つなんだよ」
「はあ……。分かりました。じゃあ、行ってきますね」
そう言って、時音は買い物に出かけた。
「さてと」
時音が出かけると、俺は自室に入り、いつものように読書を始めた。

そして時は過ぎ。
「ただいま～」
時音が帰ってきたようだ。
俺もいつもの日課を終えて暇を弄んでいたから、居間に向かう事にした。
居間に着くと、時音は台所で料理を作っている最中だった。
「兄さん、少し待ってくださいね。もうすぐ出来ますから」
「ああ」
しばらくすると、いい匂いが台所から漂い始めた。

「時音、今日は何を作ってるんだ？」
「ふふ、出来てからのお楽しみですよ」
「そうか。じゃあ、できるのを楽しみにしておこうか」
そう言い、俺はテレビをつけ、ニュースを見る事にした。
テレビでは、レポーターが未確認体の事について話していた。
曰く、未確認体は夜に出現する事が多い、夜出歩く事はできるだけ避けるように等ｅｔｃ……。
「最近多いですね、こういうニュース」
声のあった方を向くと、時音が居間に料理を運んできていた。
「俺も手伝うか？」
「いえ、数も少ないですし、大丈夫ですよ」
言う間にも時音は料理を運び終わり、夜の食事が始まった。
「兄さんも、夜はあまり出歩かないでくださいね。最近は物騒ですから」
「みたいだな」
食事の最中に交わされる会話は、やはりというか、未確認体の事でもちきりだった。
まあ、ニュースでもよくやってるからな。

晩飯を食べ終わり、居間で時音と少し雑談をしていると、いつの間にか夜遅くになっていた。
「ふむ。もうこんな時間か」
「ですね。そろそろ寝ますか」
「ああ」
俺達はそれぞれの部屋に向かう。
そして別れる前に、
「では、おやすみなさい、兄さん」
「おやすみ、時音」
挨拶を交わし、それぞれの部屋に入った。

「さてと」
俺は部屋にある窓を開けた。
外には住宅街が広がり、空には星が小さな光を放っている。
そんな光景を見据え、俺は、
「今日もいい夜だな」
そう、一言呟いた。

普段の日常（後書き）

初めての人は初めまして。
よく来る人は久しぶり。
気まぐれ執筆家こと、気まぐれ執筆家です。
別作品にて書かせてもらってましたが、ネタが出来たのでこの作品を書かせてもらいます。
いつまで続くか分かりませんが、暇潰しにても読んでやってください。

非日常

日は数時間前に落ち、辺りで輝いているのは薄暗い人工の光のみ。
そんな薄暗い世界の中、一つの影が蠢いていた。
人？
いや、それは人とは呼べない、明らかに異質なモノ。
その体は人とは呼べないほど大きく、全身が黒く、醜いものだった。
未確認体と呼ばれるモノ。
ソレが腕を振り上げ、下ろす。
その度に、未確認体の下にある何かはグチャ、グチャ、と音を立て、壊れていく。
「あ……あ……あ……」
かつて同僚と呼んでいた、人だったモノが嬲られる様を見て、そのすぐそばで悲鳴にもならない声を上げる若い女性。
逃げ出せばいいものを、腰が抜けたのか、ぴたりと床にへたりこんで、その場から動こうともしない。
そして、かつて人だったものがただの肉塊に成り果て。
肉塊に興味がなくなったのか、未確認体は次に地面に座り込んでいる女性に顔を向ける。
「ひっ！？」
その視線を向けられ、必死に逃げようとするも、体が思うように動かず、できるのは無意味に手足を動かすだけ。
そうしている間にも、未確認体は一歩一歩女性の所に歩み寄り。
そして女性の目の前に来た未確認体は、その巨大な手を振り上げる。
「っ！？」
そして女性は自分の終わりを覚悟し、目を閉じる。

ドガッ！

その場に、何かと何かがぶつかったような音が響いた。

だが。

「……」

女性の意識はまだあった。

何故なら、女性には未確認体の手は振り下ろされなかったのだから。

そして、

「いけないな、おばさン。こんな夜道を歩いてチャ」

そんな、この場の雰囲気には似合わない、他人が夜道を歩く自分を軽く嗜める、そんな声。

女性はゆっくりと目を開けた。

その視界には。

未確認体の腕を、片手で受け止める誰かの姿があった。

黄色いコートを着ていて、頭はフードで隠していた。

「だ……れ……」

「誰？誰って言われてもなァ」

言いながら、ソレは女性の方を振り向く。

その顔にあったのは。

全部が黒く、のっぺりとした顔。

鼻も耳も無く、あるのは口と、瞳孔が存在しない、紅一色の目だけだった。

そして、

「こいつらと同じようで同じでない存在サ。まあ、化け物って点は同じだがなァ」

そう言って、彼女を助けた存在は、口をニヤリと歪ませた。

「さて、トッ！！」

言いつつも腕を振り上げ、未確認体の腕を退ける化け物。

怪物はその勢いに負け、数歩後ずさりする。
「それじゃ、行くゼ！」
言いながら、化け物は未確認体に向かって走り、その勢いに任せて拳を繰り出す。
ドゴッ！
「ゴアァッ」
腹に衝撃を与えられ、くの字になりながら、後ずさる未確認体。
「まだまだァ！」
化け物はそのままの体を回転させ、回し蹴りを放とうとする。
だが、
「ウガァァッ！」
未確認体は腕を振り、化け物に攻撃を当てようとする。
「おわッ」
とっさに化け物は蹴りの動作を止め、片腕にて未確認体の攻撃を止めようとする。
無駄。
いつもの人間達のように、ガードごと体を肉塊に変える。
それが、今まで人をただの肉塊に変えてきた未確認体の経験であり、予定だった。
しかし。
その過去の経験は、この戦いに反映される事はなかった。
未確認体の攻撃による衝撃は、化け物の腕でガードされ、それ以上の効果を発揮する事はなかった。
「わりーなァ。俺は、今までお前らが相手にしてきた普通の人間とは違うんだヨッ！」
言うと同時に、空いている方の手の指先が、鋭利に尖っていく。
そしてそれを、未確認体の腹に突き刺す化け物。
「グギャァァッ！」
未確認体の断末魔。
そして、

「これで、終わりダッ！」
腹に刺さった腕を抜き取り、化け物は未確認体の頭を蹴った。
ただそれだけの行為で、未確認体の頭は粉々になり、同時に未確認体は粉々に消えていった。

「ふウ。今回も大した事はなかったナ」
言いながら、化け物は女性に振り向き、彼女に向かってくる。
（こ、今度は私……？）
殺されるかもしれない。
そう思うながらも、彼女の腰には力がまだ入らない。
そして、化け物か女性の前まで近づき、
「よう、おばさン。怪我はないカ？」
「え……？」
予想外の展開。
未確認体と同じ化け物だと思っていた存在に心配され、呆気に囚われながらも、
「は、はい。私は大丈夫です……けど……」
彼女は、かつて同僚だったモノ、肉塊へと目を向ける。
それは、誰かが元は人だったと言わなければ分からない程、酷く歪み、壊されていた。
「まあ、あんたが生き残ったんダ。不幸中の幸いと思って、これからはアレの分の生きる事だナ」
そう言って、化け物はその場を後にした。

そして後日。
現場付近は関係者以外立ち入り禁止とされ、その中で検証が行われていた。
中では数人の警察関係の人間が忙しく動いていた。
その中で。

「ったく、こんな事件は増える一方だな」
老年の刑事は、ため息をつきながら愚痴を零した。
そんな中、
「南村警部！」
遠くから、一人の若い刑事が南村に近寄ってくる。
「ああ、山野。どうだった？被害者の証言は」
「ええ未確認体に襲われたというのは今までと同じですが、やはり今回も」
「例の、言葉を喋る未確認体、か？」
南村が言うと、刑事は頷いた。
「未確認体に襲われている所を、黄色いコートを着た、言葉を喋る未確認体に助けられたそうです」
「また言葉を喋る未確認体か。今年に入って６回目だぞ？学習したのか、それとも何かの原因か……」
「それは専門の機関で分析中だそうです」
「未確認体だけでも手がいっぱいだってのに、次から次へと……」
南村は、口に含んだ煙草から煙を拭かせながら、空に向かって愚痴を零した。

非日常（後書き）

さて、前作の修正前を見ている方にとってはネタバレかもしれませんが、今はあえて言わないでおきます。
……世界観がクウガやアギト、寄生獣に似てくるかもしれません。
知らないって人はググればよし、知らなくてもいいやな人はそのまま見ていてくだし。

普段の日常　その二

それは、とある学校での会話の中で。
「ねーねー、時矢、聞いた？また喋る未確認体が出たんだってさ」
「喋る未確認体？」
後ろからの声に、俺は静香の方を振り向いた。
「そそ。とある情報筋によると、その喋る未確認体が、人間を襲った未確認体から守ったんだって」
「とある情報筋って、お前はどこからそんな情報を仕入れてくるんだ？」
「皆知ってるよ？噂にもなってるし」
「そうか？」
「でもさでもさ、その喋る方と意思疎通できれば、どうして人間を襲ったりするのか分かるんじゃない？」
「でも、喋る方は人間を助けたんだろ？そいつに話しても、人間を襲う理由なんて分からないだろ？」
「ん～。そっかな～」
「それより、あまり危ない事には首を突っ込むなよ。最近物騒なんだからな」
「その辺は分かってるよっ」
静香とはただそれだけの会話だった。
けど、周囲に耳を澄ますと、喋る未確認体がどうのこうのと、そういった会話がちらほら聞こえてきた。
「喋る、未確認体ね……」
俺は、その言葉だけを心の隅に置いておいた。

そして学校が終わり、帰り道。
俺は時音と一緒に家に向かっていた。
「今日は野菜と肉の炒め物ですよ、美味しく作りますから、楽しみ

にしていてくださいね」
「それは楽しみだな」
笑いながら会話を楽しむ俺と時音。
そんな中、視線の向こうで、住宅街のうち一軒の家から出てくる老刑事の姿が見えた。
その姿を見て、
「南村警部さん！」
時音が手を振り、それに気づいた、南村と呼ばれた老刑事は俺達の方に近寄ってきた。
「よう、二人共。元気そうじゃな」
「おっさんこそ、こんな昼間から事情聴取か？」
「刑事に休日なんてありゃせんよ」
と、喉を鳴らしながら笑う南村。
「おっさんこそ元気そうじゃないか。その様子じゃ、まだまだお迎えは来なさそうだな」
「ふん、ワシは生涯現役じゃよ」
言いながら、ニタっと笑う南村。
「しかし、あの時助けた二人がここまで成長するとは、そりゃワシも歳を取るもんじゃな」
「ああ、あの時おっさん達が来てくれなかったら、俺達兄妹もどうなってたか分からないしな」
「その辺は、南村警部さん達に感謝しなくちゃね」
「それはそうと、お前達はもう学校から帰りか？」
「はい。今日は帰って肉と野菜の炒め物でも作ろうかと」
「そいつは美味そうだな。いつかワシもご馳走願いたいもんじゃい」
「ははは、機会があればな」
「おっと、ワシはまだ聞き込みの途中じゃった。それじゃあ、またな」
そう言って手を振り、南村は去っていった。
「南村警部さん、元気そうだったね」

「ああ。あの調子じゃ、生涯現役ってのも口先だけじゃなさそうだな」
言いながら笑うと、俺と時音は再び家に向かって歩き出した。
しばらく歩いて家に着き。
いつも通りに食事をすませ、俺はいつも通りに本を読んでいると。
「兄さん、今入っていいですか？」
ドアの向こうから時音の声がした。
「ああ、いいぞ」
返事を返すと、寝巻き姿の時音が部屋の中に入ってきた。
「どうした？こんな時間に」
言いながら部屋の時計に目を移すと、もう１０時近くになっていた。
「いえ、たまには夜の雑談でもいいかなと思いまして」
そう言い、俺の座るベッドの横に腰をかけた。
「夜の雑談。何だか卑猥だぞ」
「ひ！？卑猥だなんて、そんな意味はありませんから！」
赤くなりながらも、頬を膨らませ、怒る時音。
「冗談だ。それで、何を話に来たんだ？」
「……」
時音は無言で顔を俯かせる。
それが数秒、そして数十秒過ぎ……
「兄さんは、ずっと私のそばに、いてくれますよね？」
「当たり前だろ」
「もう、家族を失うなんて、嫌ですからね？」
言いながら、俺に身を寄せる時音。
「時音。あの時の事を思い出したのか」
あの時。

それは、時音と俺がまだ年端もいかない時の事だった。
なんてことはない。
俺と、時音と、今はいない両親と、４人一緒に車でドライブに出かけた時の事。
目的地に着いたら、何をやろうか、何をして遊ぼうか。
そんな何でもない会話を車の中でしていた。
その時、俺も時音も普段と変わらない幸せを感じていたし、両親もそうだっただろう。
だが。
それは一瞬で地獄に変わった。

突然の未確認体の襲来。
最初は車の天井が音を立ててへこんだのが始まりだった。
父親は車を止め、何事かと外へ出た。
そして。
父親は黒い怪物に薙がれ、物言わぬ肉塊と化した。
そして怪物は車を叩いた。
叩いて叩いて叩いて叩いて。
その衝撃で車はひしゃげ、母親は潰された。
俺はショックで動かない時音を無理矢理後ろの席から引きずり出し、まだ続く怪物の理不尽な暴力を見ているだけしかできなかった。
やがて車が炎上し、車が鉄屑になると、怪物は俺達の方を振り向いた。
俺は妹だけは守ろうとし、怪物に殴りかかった。
だが。
怪物は小動物をなぎ払うかのように腕を振り、文字通り俺は吹き飛ばされた。
その後の事はよく覚えていない。
その時現場に辿り着いた警官達の話では、怪物は仕留められないままどこかへ逃げ去っていったとだけ聞かされた。

それが、俺と時音の味わった、最初で最後の地獄。

「……」

俺は、無言で時音の肩を抱いた。

そして、

「心配するな。俺はここにいる。どこへも行かない」

「……約束ですよ？」

「ああ、約束だ」

そのまま数分が過ぎたが、俺にとっては数十分か、それ以上に感じた。

「さて、もう自分の部屋に入って寝ろ。今日はもう遅い」

時音にそう言ったが、時音は動こうとしない。

「あの……一つお願いがあるんですが」

「何だ？」

「もしよかったら、今日は一緒に寝ていいですか？」

「あのなあ、お前もいい歳だろ……」

続きを言いかけて、気づいた。

時音の肩が、少し震えている事に。

「仕方ないな。今日だけだぞ」

「ありがとうございます、兄さん」

そうして一緒の布団に入り、横になる俺と時音。

「ふふ、久しぶりですね」

「何がだ？」

「こうして、一緒に寝るのって」

「ああ。高校生になってからは、いつも別々の部屋で寝てたからな」

「こうして抱きつくと、温かいです」

「てこら、抱きつくな！」

注意を促すが、時音は離そうとしない。

そうこうしている間に、時音は静かになった。

時音の方を見てみると、スースーと寝息を立てていた。
「……」
起こそうかと一瞬思ったが、時音の顔を見ているとそういう気分は自然と消えていった。
「まあ、たまにはこういうのも悪くはないか」
そうして、俺も目を閉じた。
こんな、なんでもない幸福な日常が続くのを願いながら。

普段の日常　その二（後書き）

いつ自分の考えている話の核に入ろうかと思いながら書いていたら、
いつの間にかこんな話になってました。
……いつ話の核に入んべか……

黒同士の邂逅

時間は深夜。
今はもう使われていない、廃墟同然の元工場。
すでに機能を失った機材が、あちらこちらに無造作に置かれている。
そんな中で、一人の女性が静かに立っていた。
彼女以外に誰もいない、静寂とした薄暗い場所に女が一人で佇んでいるのは異様な光景だったが、もし他に人がいれば、まず彼女の右手を注視しただろう。
彼女の右手は肘から先は普通の人間のそれではなく、どちらかと言えば未確認体のそれと酷似していた。
そして、その甲には水晶のような物が埋め込まれていた。
それは赤く光輝いていたが、しばらくすると赤い光は消えた。
彼女はその水晶に顔を近づけると、
「リード様、今日はいかがでしたか？」
彼女以外誰もいないはずなのに、一人言葉を喋る女性。
だが、
（問題無イ。被害が出る前に全部の禍者を倒せたヨ）
それは、水晶を通して彼女のみに聞こえる、彼女の崇拝する存在の声。
「そうですか。それはよかったです」
（これからそっちに向かウ）
「分かりました」
そう返し、彼女はまた静寂な廃墟で一人佇む。

しばらくして。
何かが廃墟の中に入ってきた。

黄色いコートを被り、頭はフードで隠している。
それは一人佇む彼女の前まで近づき、
「よウ。待たせたな、神楽」
そう喋る存在に、
「いえ、問題ありません、リード様」
と返事を返す、神楽と呼ばれた女性。
「神楽の探知した禍者は、あれで全部カ？」
「はい。リード様に殲滅していただいたもので、今夜はもういません」
「分かっタ。今晩も安心して休めそうだナ」
「はい」
「それはそうと、先日は悪かったナ。少し家の事情ってヤツで、あの時は家から抜け出せなかっタ」
「いえ、問題ありません。幸運にも、先日は禍者も出現しませんでした」
「それは何よりダ」
「それより、気になる事があるのですが」
「何ダ？神楽」
「少し前からですが、探知の範囲を広げていたところ、水晶が時々青い光を発するようになったのです」
「青い光というと……俺達と同じだったカ？」
「はい。私達と同じゲネイドが、その力を発する時に私の水晶が青く光ります」
「という事は、俺達以外にもこの力を使うゲネイドが現れ始めた、という事カ」
「悪用か偶然か、理由は判りかねますが」
「近いうちに接触した方が良さそうだナ」
「分かりました。また水晶が青く光ったら、その時はお伝えします」
「頼むぞ、神楽」
「はい、リード様」

――――――――――――――――

未確認体は、夜に現れる事が多いと言われている。
それは例外なく未確認体の体の色が黒いという理由での迷信か、
それとも存在自体が社会に仇となる故の迷信からなのか。
それはともかく。
その迷信は、しばしば破られる事が多い。
例えば今、町の真ん中で未確認体が暴れているように。
多くの悲鳴、多くの怒号。
それらが合奏曲となり、その周囲に響く。
そしてその中心にいるのは、
「グォアアァァァァアアァ！」
人より遙かに大きく、禍々しい姿をした未確認体だった。
それは逃げ遅れた人間達を蹂躙し、蹴散らしていく。
時間が立つにつれ、辺りは血の匂いで充満し、かつて人だったものの肉塊が増えていく。
そんな中、逃げ遅れた一人の男がいた。
彼は未確認体に向かって身近にある物を投げるが、それは未確認体を自分に興味を持たせる行為でしかなかった。
未確認体は、男に体を向けると、少しずつ男に近寄っていく。
そして、未確認体と男の距離があと数メートルまでという所で。
「くそっ！くそっ！くそっ！俺だって！俺だって！！！」
男は立ち上がり、叫んだ。
そして。
男の両腕が、今まで人だったそれとは異質のモノへと変化していく。
それは大きく。
それは黒く。
それは禍々しく。

さっきまで普通の人間の両腕だった男の腕は、人外の腕と化していた。
「うあああああああ！」
男は、それを振り回しながら未確認体に突進する。
その振り回した腕は未確認体に当たり、未確認体は大きくよろけた。
「やった！」
男は歓声を上げた。
自分の攻撃が、自分を脅かしていた未確認体に当たったのだから。
だが、それだけだった。
未確認体は、男の放った攻撃がなんともなかったかのように男に近づくと、男の腹に無造作に打撃を与えた。
「げふっ！？」
ただそれだけ。
それだけの行為で、男は吹っ飛ばされた。
男は地面に倒れ、口からは血を吐く。
そんな男を目の前にして、未確認体は男に近づいていく。
その光景を見て、
「たす、助けて……」
涙を流し、男は懇願するが、聞く耳を持たないのか、そもそも人の言葉を理解できないのか、未確認体は男の目の前まで接近した。
そして、未確認体は足を振り上げ、男を踏み潰そうとする。
「……っ！」
男は自分の死を覚悟し、目を瞑る。
……
……
…

だが、いつまで待っても男の意識が途切れる事はなかった。
そして。
「神楽に言われた場所に来てみたが、今回は間に合ったようだナ」
そんな言葉が聞こえ、男は、ゆっくりと目を開けた。
そこには。
未確認体の振り上げた足を無造作に掴む、一人の人間の姿があった。
黄色いコートを着ていて、頭にフードを被った人間。
だが、それを人間と言っていいのだろうか。
何故なら、未確認体の足を掴む腕は手首まで黒く、フードから覗くその顔は全てが黒で、瞳孔の無いその目は鮮やかな真紅だったからだ。
「うらぁッ！」
コートを着た者は、声と共にたったの一蹴りで、未確認体を蹴り飛ばした。
そんな様子を見て、男は、
「だ、誰？」
と聞いた。
その問いに、コートを着た者は、
「俺はリードと自称していル。お前と同じゲネイドサ」
「ゲネイド……？」
初めて聞くその単語に、男は首を傾げる。
「まあ、自己紹介は後ダ。まずはこいつを片付けるとするカ」
そう言って、リードと名乗った者は未確認体と対峙する。
一瞬だけの静寂。
先に動いたのは、未確認体の方だった。
「ゴァァァァァァ！」
唸り声を上げ、突進してくる未確認体。
そして腕を振り上げ、リードに振り下ろす。

一方、リードは何も構える事もなく、自然体でその場に立っている。
そして。
鈍い音を立て、未確認体の腕がひしゃげた。
「悪いな、禍者。俺の体は、何よりも硬イ」
そう言い、リードは左手を構える。
すると、左手の指先が、鋭利に尖っていく。
「これで終わりダ」
その言葉と同時に、未確認体の首を左手で薙ぐ。
ただそれだけの行為。
だが、その行為で未確認体の首がずれ、ゴトリと音を立て、未確認体の頭が地面に落ち、未確認体は粉となって消えていった。
「ふう、終わったカ」
リードは汗一つかいている様子もなく、ただいつもやっている仕事が終わったかのような口ぶりで言った。
「さてト」
そう言うと、リードは男に振り返る。
「お前、その力を疑問に思った事はないカ？」
「この、力？」
男は、今だ変化したままの両腕を見て、
「疑問か……何でこんなのになったのかって、毎日考えてた。あいつら未確認体と同じになったんじゃないかって考える時もあった」
「半分正解で、半分外れダ」
「それって、どういう事なんだ？」
「お前に二通りの選択肢をやル。このまま日常の世界で普段通りの生活を続けるか、俺達の組織に加わるカ。幸運にも、この現場を見ている人間はいないらしイ。どうすル？」
「……」
男は、自分の両腕を二度見て、
「俺は、この腕が何なのか知りたい、それだけなんだ。あんたにつ

いて行けば、それが分かるのか？」
「あア」
リードの返事に、男は少し考えると、
「……分かった。とりあえずあんたについていくよ」
「よシ。ならついて来イ。こっちダ」
そうして、リードと男はその場を去って行った。

黒同士の邂逅（後書き）

とりあえず書き溜めしていたものは出し終わりました。
次どんな話にしようかと試行錯誤中です。
話の構成は頭の中で決まっているんですが、途中の話を書くのに時間がかかるという始末でｏｒｚ
意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2824y/

黒の異邦人（仮）

2011年11月14日03時29分発行